

平成 25 年 10 月 30 日

東松島復興推進員だより（第18号）

～地を往きて走らず～

■インターン生による地域復興推進員へのインタビュー 佐々木推進員編

JICA 東北支部でのインターンシップで、復興支援の取り組みを中心に学んでおります安藤紗和です。インターンシップを通じて、取材を行った JICA が被災地へ派遣している地域復興推進員の取り組みを紹介させていただきます。

被災者の方々の地域復興を支援するため、JICA は 2011 年 8 月から、震災復興モデル事業として、宮城県東松島市に地域復興推進員を派遣しています。2013 年 8 月には、地域復興推進員が赴任してから 2 年の節目を迎えました。赴任してからこれまでどのような思いで活動されてきたのか、今後どのように活動する予定なのか、東松島市地域復興推進員にインタビューを行いました。

JICA の地域復興推進員とは、青年海外協力隊の経験や地元の人脈を生かして地域のニーズをくみ取り、コミュニティ再生を支えている方々です。東松島市で地域復興推進員として活動しているのは、東松島市宮戸地区で活動している四倉禎一郎さんと、東松島市野蒜地区で活動している佐々木潤さんの、お二人です。



研修員事業での視察へ同行・説明



海外からの研修員への講義

今回は、野蒜地区で活動されている佐々木推進員をご紹介します。
佐々木推進員は、震災前には青年海外協力隊としてアフリカのガーナで村落

開発員普及員として活動しており、震災後は被災地でしばらくボランティア活動を実施し、2011年8月に地域復興推進員として赴任しました。以前から村落開発に興味がありコミュニティ支援の道を目指していたこともあり、地域復興推進員の道を選んだとお話ししていました。

佐々木推進員は、途上国での経験から住民主体のまちづくりが重要であるという考え方を基に、途上国で得た何事にもチャレンジする精神を忘れずに活動を行っています。

<地域復興推進員の活動>

佐々木推進員は、青年海外協力隊の一員としてガーナで活動しましたが、そこでも地元の人達と問題や課題を見つけ出し、地元住民と行政と共に解決していきました。また、住民が集まる場に参加し、いろいろな考えに耳を傾けることでだんだんと問題や課題が明らかになってきたとお話ししていました。

東松島での活動では、まず、住民や行政、関係者との信頼づくりから始まり、協力づくりへと移行したといます。現在では住民と行政が立ち上げた復興協議会において資料や議事録を作成したり、意見の取りまとめや「野蒜復興新聞」を作成し情報の発信を実施したりするなどの協力をしてられます。



地域での協議に協力



住民会議への参加

このように住民の課題を見つけ出し活動されていますが、推進員の役割についてはどのように考えているのか伺いました。

佐々木推進員は、推進員の役割としては、住民主体で活動できるコミュニティの環境づくりを推進する役割、住民が持っている問題や課題を見える形で発信し外部や仲間と共有し解決するための鏡の役割、専門家・支援金・事業など外部とのつながりをつくる役割を挙げていました。

佐々木推進員が推進員の役割として挙げていた、住民の方の意見の吸い上げや住民主体のコミュニティづくりについて、住民の方々の意見や考えを協議会以外ではどのように把握し、復興プロセスに様々な世代の意見や考えを取り入れるためにはどのような工夫をされているのでしょうか。

佐々木推進員は、外部支援者として、上記の役割を意識しながら、住民や地域が抱える課題を見える形で共有できるよう工夫しているとお話ししていました。

住民や行政、関係者が様々な会議に参加することで、問題点や問題意識を共有できたり、多くの人々が問題点や問題意識を共有することで、より多くの人との協力とアイデアをもって解決していくことができると考えています。

例えば会議には若い世代の参加が少ないという問題を抱えていますが、若い世代の意見や考えを取り込もうと考えている住民もあり、いろいろと知恵を絞っています。また、会議に様々な世代を取り込む工夫としては、若者をどのように巻き込んでいくかの問題意識を共有し、それぞれの意見やアイデアを共有します。ある住民は自分の子どもに声をかける、友人に声をかけるなど横のつながりを活用し若者を巻き込むことを試みたりもしました。また地域の協議会として復興新聞などの情報誌を発行し多様な世代で問題意識を共有するなどの工夫もしているそうです。



地域住民と勉強会を開催



協議会の結果は「復興新聞」として情報発信

<地域復興推進員の思い>

最後に、推進員の活動に対する思いについて伺いました。

佐々木推進員は、「地域住民と行政と協力して活動できることは、受け入れ側

の理解があって初めて実現することで、地域の方々に感謝しています。また、住民や地域のための活動でありやりがいもあります。他にも住民が情報誌を楽しみにしていたり、情報誌がきっかけで協議会に参加してくれた住民がいたりしたときは嬉しかったです。そして会議を継続していくにつれて活発に活動する住民もいて主体性を感じられることもあります。感激したこととしては、息子のように接してくれる方もおり、お弁当を作ってくれたり、食事に誘ってくれたり、他人に奉仕する人や心優しい人が沢山おり、多くの事を学ばせてもらっています。皆さんから学ばせてもらっていることを胸に今後も出来る限りの活動を通して貢献していきたいと思います。」とお話ししていました。

<インタビューを終えて>

インターンシップを通じて、JICA が被災地へ派遣している地域復興推進員の取り組みについて学ぶ一環として、実際に地域のコミュニティに入って活動されている推進員のお二人からお話を伺うことができました。普段、住民の方々と近い距離で接している方からお話を伺う機会はなかなかないため、とても貴重な機会となりました。

推進員などの外部支援者は、地域のコミュニティに参加することが困難になりがちですが、お二人は様々な工夫をしながら活動をされていて、どうしたら住民主体の復興を進めることができ、かつ、持続可能なまちづくりができるのかを常に考えながら、地域に密着して活動されている様子が伺えました。

お二人のお話を伺っている中で、持続可能なまちづくりには若者の参画が必要不可欠であり、高齢化が進む社会において、高齢者と若者の共生がより重要になってくるのではないかと思いました。まちづくりに参加するのが高齢世代になりがちになっているようですが、そのような中、お二人は、多様な世代を取り込むために様々な工夫をされていました。

その地域の特色を活かしながら住民主体の持続可能なまちづくりを可能にするには、地元の人々はもちろん、外部支援者も苦悩することをお二人のお話を伺ったことで改めて知ることができました。

今後も、持続可能なよりよいまちづくりを行うためにより多くの住民を巻き込んで住民主体の話し合いがなされ、その地域の復興に資することができたらと、お二人の活動を拝見して思いました。

お話を伺わせていただいた、東松島市地域復興推進員の四倉推進員、佐々木推進員、ありがとうございました。今後のご活躍もお祈り申し上げます。

【推進員だよりバックナンバー：JICA東北ホームページ】

<http://www.jica.go.jp/tohoku/enterprise/shinsai/index.html>

以上

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団（NPO）等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。
